

好ましい友人関係の育成を目指した学級経営の工夫

— ソシオメトリック・テストの活用を通して —

浦添市立沢岬小学校教諭

山城 奈美

目 次

I	テーマ設定の理由	1
II	研究の基本的な考え方	1
1	好ましい友人関係とは	1
2	ソシオメトリック・テストについて	2
III	研究の目標	3
IV	研究の仮説	3
V	研究の内容	3
VI	研究の方法	3
VII	研究の実際	4
1	友人関係の実態調査	4
2	指導・援助の方向付け	8
3	ソシオメトリック・テストを活用したグループ編成	9
4	検証指導の実際	10
(1)	実践例1「グループ替え」	11
(2)	実践例2「学習新聞づくり」	12
(3)	実践例3「友だちの良いところを見つけよう」	14
(4)	実践例4「もっと友達になろう」	15
5	友人関係の変容	18
VIII	研究のまとめ	20
1	研究の成果	20
2	今後の課題	20
	おわりに	20
	参考文献	20

好ましい友人関係の育成を目指した学級経営の工夫

—ソシオメトリック・テストの活用を通して—

【要 約】

この研究は、ソシオメトリック・テストの活用を通して、好ましい友人関係の育成を目指した学級経営の在り方を探究しようとするものである。

テスト結果により友人関係の実態を把握して課題を探り、具体的な手だての実践を通して個人及び学級集団の変容を促した。

その結果、ソシオメトリック・テストを活用した「児童理解」「グループ編成」の重要性と、「構成的グループ・エンカウンター」等の手だての有効性を確認できた。

キーワード □ 学級経営 □ 友人関係 □ ソシオメトリック・テスト □ 児童理解

I テーマ設定の理由

学校教育は知的側面の発達と情意的側面の発達が相互に働き合って成り立つものであり、その基盤となる学級が“心のよりどころ”として存在するとき、教育的効果が期待できると考える。良好な人間関係が培われた場合には、友情と信頼、協力と連帯に結ばれた「楽しい」「温かい」「活気のある」学級の雰囲気醸成されてくる。その雰囲気づくりをしていく中で、より望ましい人格形成に向けて支援していくのが学級経営の目標であり、私たち教師の役目である。

小学校生徒指導資料1「児童の理解と指導」(文部省 昭和57年3月)には、「特に児童の人間形成において友人関係は大きな影響力をもっており、児童期における発達課題のひとつとして『友人との適切な仲間関係の成立』が挙げられる」とある。教師と児童の人間関係の重要性もさることながら、児童と児童の結び付きである友人関係が良好であるか否かが、社会性の発達や道徳性の発達に極めて重要な意義を持つ。友人関係のトラブルが心理的な背景となって、学校生活の楽しさを左右し、不登校やいじめなどの問題行動に結び付く事例も多々報告されている。教師が児童の安定した友人関係の成立に配慮し、具体的に指導・援助していくことは極めて重要である。

しかし、実際には表面に現れたかかわり方だけで友人関係の真意をはかるのは難しく、集団の中で一人一人を的確に捉えて、実態に即した指導がなされ

ているとは言い難い。そこに私が常に持ち続けている反省と課題があり、「好ましい友人関係に支えられた学級」の中で児童を見つめていきたいという願いがある。

そこで、好ましい友人関係の育成を目指した指導・援助の在り方を探究していくためには、まず、一人一人の児童及び学級集団の現状について、客観的に把握することが大切であると考え、ソシオメトリック・テストの活用を図ることにした。日常観察や対話が児童理解を深める第一歩であることは言うまでもないが、それだけでは主観的理解や見過ごし、光背効果等に左右される懸念がある。仲間集団の網の目からこぼれかかっている子をいち早く発見し対応したり、より望ましい方向へ友人関係の調整をしていくためには、ソシオメトリック・テストによる現状把握が必要であると考えた。

以上のことから、本テーマ「好ましい友人関係の育成を目指した学級経営の工夫 —ソシオメトリック・テストの活用を通して—」を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 好ましい友人関係とは

児童はどのような友達観をもっているのだろうか。学級編成当初の4月に4年生の児童(4年A組33人)に友達についての意識調査を行った。

「クラスの中で友達になりたい人はどのくらいいますか」の問いに「できるだけたくさんの人と友だちになりたい」と26人が答え、残りの児童も「少し

は友だちを増やしたい」と答えた。全ての児童が、新しい出会いの中で友達の輪を広げていくことを希望し、期待を抱いていることが分かった。

「友達のこと、困ったり、悩んだりしたことがありますか」の問いでは、「ある」が17人、「ない」が16人。約半数の児童が友達のこと、困ったり悩んだりした経験（意地悪された、文句を言われた、命令された等）があることが分かった。

「もし友達と喧嘩したり、うまく話ができなかったら、どんな気持ちになりますか」の問いでは、21人の児童が「とても嫌な気持ちになる」と答え、「学校が楽しくなくなる」「友達をやめたい」と答えた児童もいた。しかし、「その時には謝って仲直りしたい」と、その後の良好な友人関係の回復を願う回答をした児童も7人見られた。

「どんな学級にしたいですか」でも、「明るくて楽しい学級」「仲良く元気な学級」「けんかやいじめのない学級」「助け合う学級」の回答が9割以上得られ、「みんなと仲良くしたい、うまくかかわっていききたい」という思いをほとんどの児童がもっていることがうかがえた。

また、「本当の友達とは？」の問いに、次のように答えている。（複数回答）

気軽に話せる (16) 優しい (9) 親切 (6)
何でも相談できる (6) 困った時助けてくれる (4)
一緒に遊んでくれる (4) 仲良くしてくれる (2)
わからないところを教えてくれる (2)
たのみをきいてくれる (2) 思いやりがある (1)

以上の結果をまとめてみると、児童は親和的・友好的なかかわりを前提とした友人関係を望む傾向にあることが分かる。それは同時に教師に対して、新学期当初の緊張と不安に包まれた学級の雰囲気や和らげ、安定した友人関係の確立を図る支援を求めていることも示唆していると言えよう。

そこで「好ましい友人関係」を次のようにとらえ、本研究を進めていきたい。

【好ましい友人関係とは】



親和的・友好的な関係

- *親和的な関係で、仲間はずれや極端なボスがいない
- *誰とでも協力し、助け合って、学習や生活ができる
- *相手の立場に立って思いやりのある行動がとれる
- *一人一人の存在感があり、お互いのよさを認め合える

2 ソシオメトリック・テストについて

(1) 概要

ソシオメトリック・テストは、モレノ (Moreno, J.L., 1934) のソシオメトリー理論に基づく、集団内におけるインフォーマルな人間関係の構造を明らかにする技法の一つである。

『一人一人の児童の集団における関係や社会的位置、意識傾向、成員間の心理的な関係、集団の構造などを明らかにし、それから指導・援助の方向づけを行い、一人一人が集団の中で生かされるように実践すること』を目的としている。

調査の場面つまり「選択・排斥の基準」の設定の仕方は、**実践基準**（児童の回答が実際の生活に反映されることが約束されている場合）と、**診断基準**（架空の場面を想定した単なる調査で、何のフィードバックもされない）の二つに大別される。

ソシオメトリック・テストの実施により、次のようなことを知ることができるが、数値に振り回されたり、安易にレッテルを貼ってしまうようなことは厳に避け、温かい児童理解を心がけたい。

- *成員間の好意的、拒否的、または無関心の関係
 - ・ 選択も排斥もされない児童（孤立児、周辺児）
 - ・ 選択を独占している児童（人気児、ボスの存在）
- *一人一人の交友関係の広がりや範囲
- *小集団の存在とそのリーダー
- *学級集団の雰囲気（親和的、反発的）
- *学級集団の構造と凝集性

(2) 活用について

本研究でのテストは、「学級集団」という特定の場限定され、「グループづくり」の実践基準で実施される。テストの信頼性を高めるため、実施後はできるだけ早く結果を活用したグループ編成を行い、指導・援助の手だてを講じていきたい。

また、誰が誰を選択したか排斥したかについては、テスト実施中はもちろん、その結果の処理においても「秘密の保持」が原則である。



Ⅲ 研究の目標

ソシオメトリック・テストの活用を通して、好ましい友人関係の育成を目指した学級経営の在り方について探究しようとするものである。

Ⅳ 研究の仮説

1 基本仮説

ソシオメトリック・テストを活用し、学級の実態に応じた指導・援助の手だてを実践することにより、好ましい友人関係の育成を目指した学級経営ができるであろう。

2 作業仮説

仮説1 ソシオメトリック・テストを実施し、分析することにより、学級内の友人関係の現状把握が深まるであろう。

仮説2 調査結果を考察することで個人や集団の問題点・課題が明らかになり、指導・援助の方向付けができるだろう。

仮説3 調査結果を活用したグループ編成を行い、親和的・友好的関係の深まりに配慮した手だてを実践することにより、個人及び学級集団の好ましい変容が促せるであろう。

V 研究の内容

1 理論研究

- (1) 学級経営に関する先行文献の研究
- (2) ソシオメトリック・テストに関する研究

2 実践研究

- (1) ソシオメトリック・テストの実施と調査結果の分析・考察
- (2) 友人関係の課題の設定
- (3) 指導・援助の手だての明確化
- (4) 調査結果を活用したグループ編成
- (5) 検証指導の実践
- (6) 児童の意識調査（友達観、学級の雰囲気）

Ⅵ 研究の方法

1 調査及び実践の対象

浦添市立T小学校 4年A組 33人

（男子18人女子15人）

2 調査の実施

(1) 友人関係の実態調査

① 第1回ソシオメトリック・テストの実施

ア 期日・・・平成8年4月23日

イ 目的

「グループづくり」の実践基準で実施し、児童一人一人の友人関係や学級集団の構造について傾向を探る。結果の考察を基に学級内の友人関係における課題を見つけ、本研究の焦点化を図ることとする。

② 第2回ソシオメトリック・テストの実施

ア 期日・・・平成8年7月2日

イ 目的

第1回と同じ方法で再度実施し、調査結果を第1回の結果と比較することにより、個人及び学級集団の変容を確かめる。

(2) 意識調査

① 友達観について（平成8年4月16日実施）

② 学級の雰囲気について

（平成8年4月23日、7月2日実施）

3 検証指導の実践

- (1) ソシオメトリック・テストの結果を活用してグループ編成を行い、親和的・友好的な関係が深まるように配慮した手だてを実践する。
- (2) 再度ソシオメトリック・テストを実施し、個人及び学級集団の変容を確かめる。
- (3) 検証指導に用いたカードやその後の感想、学級の雰囲気についての意識調査結果、及び行動観察の記録などの資料を通して児童の変容を捉える。

Ⅶ 研究の実際

1 友人関係の実態調査 (第1回 ソシオメトリック・テスト)

(1) 調査の手続き

『田中ソシオメトリック・テスト』(日本図書文化協会発行)を参考に「グループづくり」の実践基準で質問紙を作成し(表1)、学級内の友人関係の実態について調査した。選択・排斥の人数制限は5人までとしたが、記入そのものは自由にした。「だれでもよい」「みんな」「一人もいない」の回答や、理由についても「わからない」「何となく」の表現を認めた。

表1 ソシオメトリック・テストの用紙
(グループづくり希望調査)

グループづくりの希望ちょうさ			
年	組	番(男、女)	名まえ
<p>【しつもん1】 楽しいクラスにするために、新しいグループをつくりたいと思います。あなたは、このクラスの中のだれといっしょになりたいですか。好きなグループになりたいお友達の名まえを書いてください。なんんでもよいのですが、なるべく5人までにしてください。男子でも女子でもかまいません。そして、そのわけを書いてください。</p>			
		おなじグループにのりこい	のりこい
1			
2			
3			
4			
5			
<p>【しつもん2】 新しいグループをつくる時、できたらいっしょになりたくないお友だちがいますか。もし、そのような人がいたら、その人の名まえを書いてください。5人まで書けるようになっていますが、なんんでもかまいません。男子でも女子でもよいです。そして、そのわけを書いてください。</p>			
		おなじグループにのりこい	のりこい
1			
2			
3			
4			
5			

実施前に秘密の保持とグループ編成の実践を約束し、「友達観」の意識調査により得られた『仲の良い楽しいクラスをつくりたい』という願いに即したものであることを話した。

(2) 結果と考察

結果の処理には、コンピューターソフト『ふれん図』(スズキ教育ソフト)を用いた。学級の下位集団構成を見るために、集団構造マトリックス(P5図1)を基にして、ソシオグラム(P5図2)を作成した。

① 学級集団全体としての傾向

図1・図2より学級集団の構成について見てみると、次のような小集団に分かれていることが分かる。人気児、孤立児、周辺児の決め方については、田中熊次郎(1968)の考え方を参考にした。

ア 下位集団について

- 第1下位集団 (男子15人)
- 第2下位集団 (女子6人)
- 第3下位集団 (女子3人)
- 第4下位集団 (女子3人)
- 第5下位集団 (女子2人)
- 第6下位集団 (男子2人)

イ 人気児……………1人 (O男 Isss=0.478)

【*社会測定的地位指数Isss \geq 0.45】

ウ 孤立児……………2人 (M男, D子)

【*被選択数C=0, 相互選択数mc=0】

学級全体の選択排斥差引得点CRS(被選択数C-被排斥数R)が88(106-18)と高く、一人当たり3.2人(106/33)から選択を受けたことになる。また、相互選択数も68(対34)で、数値的には親和的傾向にある集団であることがうかがえる。

男子は孤立児を含む3人(M男・C男・E男)を除いて一つの大きな集団にまとまっている。第6下位集団のC男とE男の2人が第1下位集団に入れないのは、C男とF男が相互排斥していること、E男にC男以外の相互選択がないことが要因である。

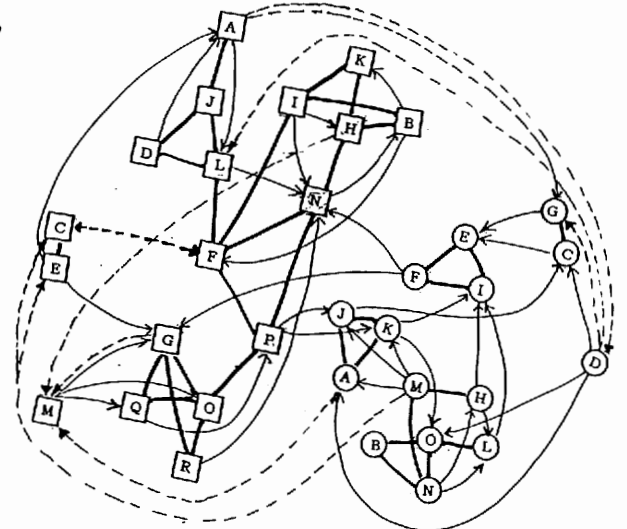
女子は、4つの小集団と孤立児に分かれている。それぞれの下位集団内の連結は強く、児童中期(小学校3・4年生)の特徴である「仲良し組」とよばれる仲間の発生を表している。下位集団同士の極度の

排斥は見られず、小集団への分裂は、成長の過程で一般的に見られる範囲のものであると考えられる。

同性間でかたまる傾向が顕著に見られるが、極端な排斥傾向は見られず、男女の相反、下位集団間の対立も表れていない。異性を選択したのはP男・F子の2人だけであり、学級編成当初のお互いのかかわりの希薄さが考えられる。

実態をふまえた指導の方向性としては、まず第一に孤立した児童に親しい友人づくりの支援をすることが大切である。次に、学級のまとまりを作っていくために、男女が混ざった形に集団の輪を広げていけるような手だても考える必要がある。人気児のO男、lsssの高いN男・G男・O子、下位集団の橋渡し役となりそうなK子・I子あたりが、学級内の友人

関係において重要な選択を受けていると推察できる。



□男子 ○女子
← 選択 — 相互選択 ····· 排斥 ←····· 相互排斥

図2 ソシオグラム (グループづくり, H8.4.23)

選択者		被選択者														C	R	CRS	mc	mr	lsss	備考
		I	II	III	IV	V	VI	VII	C	R	CRS	mc	mr	lsss	備考							
		O G N F H P L I J Q B K R D A	O N B M L H A J K	I E F	C G	E C	D M	被選 択数	被排 斥数	差引 得点	相互 選択	相互 排斥	地位 指数									
I	第1下位集団	O男	●					5	0	5	4	0	0.478	人気児								
		G男	●					7	0	7	3	0	0.409									
		N男	●					7	0	7	3	0	0.409									
		F男	●					5	1	4	4	1	0.363									
		H男	●					4	0	4	3	0	0.363									
		P男	●					4	1	3	3	0	0.347									
		L男	●					4	2	2	3	0	0.331									
		I男	●					3	1	2	3	0	0.331									
		J男	●					3	2	1	3	0	0.316									
		B男	●					4	0	4	2	0	0.263									
Q男	●					3	0	3	2	0	0.247											
K男	●					3	0	3	2	0	0.247											
R男	●					3	1	2	2	0	0.231											
D男	●					2	0	2	2	0	0.231											
A男	●					3	0	3	1	0	0.147											
II	第2下位集団	O子		●				5	0	5	3	0	0.378									
		N子		●				3	0	3	3	0	0.347									
		B子		●				2	0	2	2	0	0.231									
		M子		●				2	1	1	2	0	0.216									
III	第3	A子			●			3	0	3	1	0	0.147									
		J子			●			2	0	2	1	0	0.131									
		K子			●			4	0	4	2	0	0.263									
IV	第4	I子			●			4	0	4	2	0	0.263									
		E子			●			4	0	4	2	0	0.263									
V	第5	C子				●		5	0	5	2	0	0.278									
		G子				●		4	0	4	2	0	0.263									
VI	第6	E男					●	2	0	2	2	0	0.231									
		C男					●	3	0	3	1	0	0.147									
VII	孤立	D男						1	2	-1	1	0	0.084	孤立児								
		M男						0	1	-1	0	0	-0.016									
選択数		4	3	4	5	3	5	4	3	3	5	2	3	3	2							
排斥数		0	3	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	2								
									106		88	68										
									18		2		7.975									

図1 集団構造マトリックス (H8.4.23)

備考

● CRS (Choice Rejection Score) … 選択排斥差引得点

一般に「人気」の程度を示すもの。被選択数C - 被排斥数R。

● lsss (Index of Sociometric Status Score) … 社会測定的地位指数

成員間でどれくらい好意に恵まれているかを表す客観的な個人的指標。-1から+1の範囲で表示。

$$lsss = 1/2 (CRS/N - 1 + (mc - mr) / d)$$

* N…集団人数 mc…相互選択数 mr…相互排斥数 d…選択排斥制限数

② 個人について (抽出児)

テストの結果より、この学級では、孤立児のM男・D子、Isssが低く集団適応につまずいていると思われるC男の3人が、一応問題傾向にあると考えられる。3人について、それぞれがどのような対人関係を周囲に持っているかを見るために、社会的原子図(図3, 図4, 図5)で表した。本研究では、M男・D子・C男の3人を抽出児として取り上げ、友人関係の変容を探っていく。

* **M男** 孤立傾向にある。本児は第1下位集団内の4人を選択。Isssの高いO男を介して友達づくりの手だてを考えたい。被排斥の理由は「意地悪をする, 殴る」となっている。友達とのかかわり方について指導する必要がある。

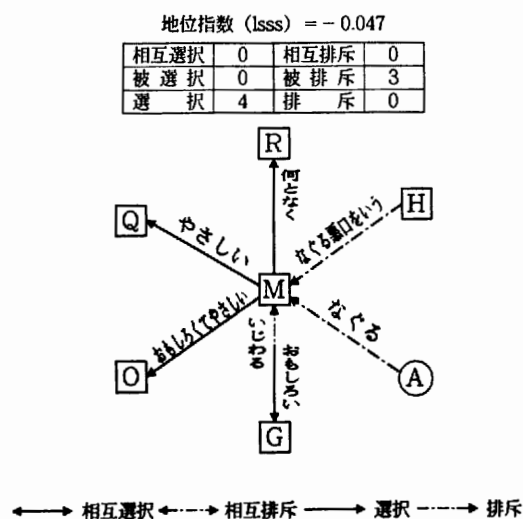


図3 M男の社会的原子図

* **D子** 孤立傾向にある。被排斥の理由は「前学級の時に意地悪をしていた」。本児は第2・第3・第5下位集団のいずれもIsssの高い、いわゆる目立つ存在の児童を選択。第5下位集団(女子2人)内1人を第1位で選択し、もう1人を排斥している。いろいろな児童とかかわりを持つようとしているが、まだその輪の中に入らないうまく入っていけない状況がうかがえる

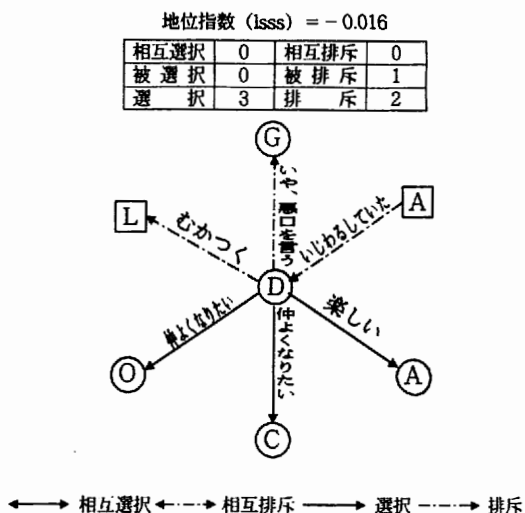


図4 D子の社会的原子図

* **C男** 唯一の選択であるE男と2人組の第6下位集団を作っている。F男とM男の2人から排斥されており、F男とは相互排斥である。E男もIsssが低い、E男が選択した第1下位集団内の2人(G男・A男)を通して友人関係の広がり期待したい。

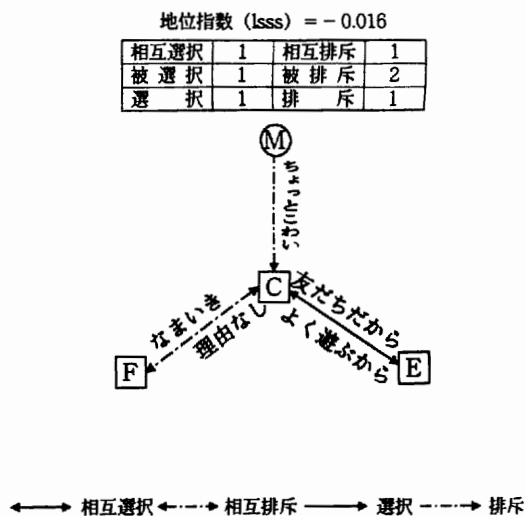


図5 C男の社会的原子図

③ 選択・排斥理由の分析

ソシオメトリック・テストで得られた選択(106)・排斥(18)のそれぞれの理由について、布村雅子(1951)が作成した8類型の理由分類に基づいてまとめ(表2-1・表2-2), グラフ(図6)で表した。

表2-1 ソシオメトリック・テスト選択理由分類表

類型	具体的な内容
協力 (25)	優しい (23) 親切 (1) 文句を言わない (1) おとなしい, 思いやりがある, みんなのことを考える
緊張解消 (20)	楽しい (14) おもしろい (5) にぎやか (1) 明るい, ほがらか, 愉快, 活発, 好きなタイプ
類同性 (9)	一緒に遊ぶ (7) いい人 (1) 空手の話ができる (1) 気が合う, 好き, 性格が似ている
信頼 (18)	友達 (15) 仲良し (2) 秘密を教えてくれる (1) 信頼できる, 嘘を言わない, 約束を守る
功利性 (25)	分からないとき教えてくれる (8) 仲良しになりたい (6) 当番を手伝ってくれる (4) 遊んでくれる (3) 味方になってくれる (1) ものを貸してくれる (1) サッカーをさせてくれる (1) 仲間に入れてくれる (1) 気前がいい, ~したい, 良い子だから
優越性 (3)	かわいい・ハンサム (2) 勉強ができる (1) 運動ができる
方向づけ (0)	几帳面, きちんとしている, 真面目, 相談にのってくれる
その他 (6)	一緒に帰る (1) わからない (4) 何となく (1)

表2-2 ソシオメトリック・テスト排斥理由分類表

類型	具体的な内容
非協力 (13)	意地悪 (7) 殴る (3) 悪口を言う (2) 命令する (1) 自分勝手, いばる, ふざける, いたずらをする
緊張 (2)	こわい (1) 変なことをする (1) すぐ泣く, 弱虫, 短気, すぐ怒る, はっきりしない, お節介, いらいらさせる
非類同性 (3)	不気味 (1) 喧嘩しそう (1) 嫌い (1) 気が合わない, 遊ばない, 不潔な感じがする, 性格が合わない
不信 (0)	無責任, 信頼できない, うそを言う, 約束を守らない

非功利性 (0)	遊んでくれない, けち, 人の物を使う, 人の物をとる, 誰か (親) に仲良くしないように言われた
非優越性 (0)	顔が気に入くない, 格好悪い, 勉強ができない, テストを見る
方向づけ (-) (0)	人の邪魔をする, 騒がしい, だらしがない, 忘れ物が多い, 怠ける, すぐ頼る, 不真面目
その他 (-) (0)	

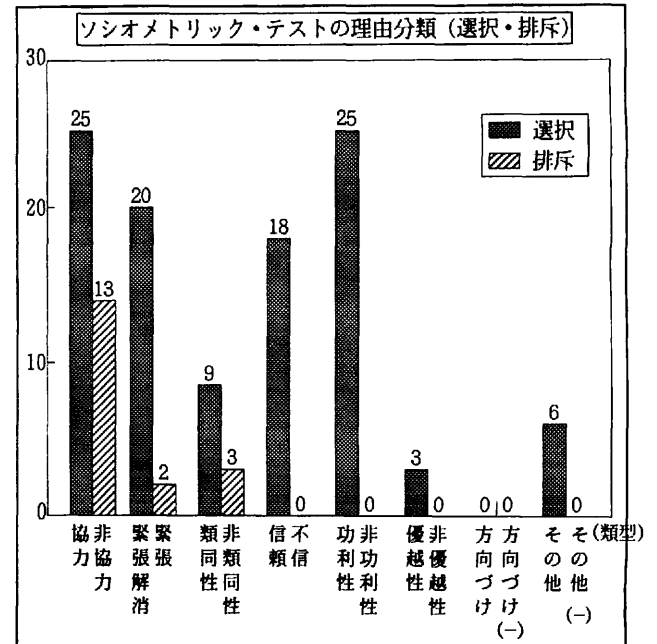


図6 選択・排斥の理由

ア 選択の理由について

図6より選択の理由について見てみると、「協力」「功利性」「緊張解消」「信頼」「類同性」「優越性」の順で友達を選ぶ傾向にあることが分かる。

表2-1よりその具体的内容を見ると、「優しい, 楽しい」という同情共感要因が多く, 交友関係の強い基盤をなすのが『同情愛着』の感情的結合であることが分かる。類同性の中の「いつも一緒に遊ぶ」という相互的接近要因も多く, 遊びの中でかわりを多く持つことを通して, 仲間関係を広げることがうかがえる。

学級編成当初で, 「前から友達だったから」と気心の知れた友人を選ぶ回答が多い中, 「仲良しになりたいから」という前向きな選択もみられた。友人関係が固定的でないこと, 新しい出会いの中で新しい安定した仲間関係をつくりたがっていることが推察される。

また、「～してくれるから」という「功利性」の類型の選択が多く見られた。これは、「友達の良さを知っている」ともとれるが、『グループ』という実践基準のため、この子がいたら助けてもらえるというような依頼心の表れとも考えられよう。

イ 排斥の理由について

次に排斥の理由を図6より見てみると、主に「非協力」の要因で友だちを排斥している傾向がある。「非功利性」や「方向づけ(-)」といった学級全体へも影響を及ぼす排斥は表れていない。

排斥の具体的な理由を表2-2より見てみると、「不気味」「恐そう」「喧嘩しそう」という偏見によるものと判断される内容もあり、友達の良さに目を向ける指導も講じる必要があるだろう。

また、排斥をされている児童は、同じ理由が重なって表れていることから、本人の対人的行動の未熟さにもその原因があると考えられる。

2 指導・援助の方向付け

(1) 実態調査による課題

ソシオメトリック・テストの結果により得られた学級の実態から、好ましい友人関係の育成を目指して、次のような課題を立てた。

学級の実態

- ・孤立児が2人いる。
- ・男女別の6つの仲良し集団に分かれている
- ・集団同士のかかわりは薄い。
- ・全体的に見て親和的な傾向にある。

- 課題1 孤立児に仲間づくりの支援をしたい
- 課題2 グループ編成・グループ活動を通して親和的な関係を深めたい
- 課題3 男女混合の小集団発生を促したい

(2) 具体的な指導・援助の手だて

学級という一つの枠の中で、一人一人の児童と学級集団そのものが相互作用しながら成長し合うことを前提に、教育相談的配慮を加味した手だてを考えてみた。

表3-1は、主に課題1に応じた「個人」に対する具体的な手だてである。抽出児を主な対象として考えるとともに、抽出児に限らず、学級内全ての児童一人一人への援助としても捉えたい。

また、主に課題2・課題3に応じて学級全体の変容を促すための指導の工夫について、表3-2にまとめた。

表3-1 個人に対する指導・援助の手だて

基本的な指導方針	指導・援助の手だて	期待される児童の変容
○日常の行動観察を継続し、機会をとらえて小さいことでも認め励ますようにする。	*長所を生かせる当番や係・学習リーダーの役割分担 *集団の中での評価 *家庭との連携	*自己存在感が高まり、自信がついてくる。
○カウンセリングマインドで接し「聴く」ことを心がける。 ○スキンシップ、声かけを多くし教師との人間関係を深めていく。	*メモ日記による指導 *あいさつ、声かけ *気軽な会話 *休み時間に一緒に遊ぶ	*教師に対する緊張感がほぐれ親しく接するようになる。 *心を開いてくる。 *自分のことを素直に表現するようになる。
○友達との好ましいかかわり方について考えさせる。	*時と場に応じた個別指導 *給食時間のグループカウンセリング	*友達の良さに気付くようになる。 *相手のことを考えて、好ましいかかわり方ができるようになる。
○自己中心的な言動を改め、協力し合うことの大切さを学ぶ機会をつくる。	*グループ活動を通しての指導 *学級活動や道徳の授業の中での指導	*協調性が芽生え、わがままをおさえることができるようになる。 *協力し合うことの大切さを感じとれるようになる。

表3-2 学級全体に対する指導・援助の手だて

基本的な指導方針	指導・援助の手だて	期待される児童の変容
<ul style="list-style-type: none"> ○児童理解に努め、孤立児やいじめが発生しないように配慮する。 ○仲間づくりのきっかけをつくる。 ○心をこめた触れ合いの体験をさせる。 ○親和的な雰囲気づくりを心がける。 ○クラス全員で遊ぶ機会をつくる。 ○共通の目標をもたせる。 	<ul style="list-style-type: none"> *シオメトリック・テストを活用したグループ編成(実践例1) *定期的な席替え <hr/> <ul style="list-style-type: none"> *構成的グループ・エンカウンター(実践例4) *学級集会活動 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> *学級の目標・歌・マークづくり 	<ul style="list-style-type: none"> *クラスへの安心感、所属感が生まれ、楽しいと感じるようになる。 *親和的な関係が深まり、教師・児童相互の信頼関係ができる。 *仲間意識が高まり、集団としてのまとまりが感じられるようになる。 *明るく活気のある学級の雰囲気がつくられる。
<ul style="list-style-type: none"> ○友達の大切さについて考えさせる。 ○友達の良さを認め合う機会をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> *学級活動での話し合い *道徳の授業(実践例3) *「親切カード」「思いやりの木」等の掲示 *朝の会・帰りの会「いいところ見つけた」「まわるノート」 	<ul style="list-style-type: none"> *一人一人の良さに気づきお互いを認め合えるようになる。 *友情の大切さを考えるようになり、お互いの信頼感が深まる。
<ul style="list-style-type: none"> ○男女仲良く助け合い、協力し合う機会をつくる。 ○グループ活動を通して、良好な仲間関係を育てたい。 	<ul style="list-style-type: none"> *グループでの学習や作業(実践例2) *当番や係活動 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> *グループ日記 	<ul style="list-style-type: none"> *協力し助け合うことの大切さが分かり、責任感が身についてくる。 *成就感を味わえる。 *親和的な関係が深まる。

3 ソシオメトリック・テストを活用したグループ編成

(1) グループ編成の工夫

学級の親和的な雰囲気を高め、一人一人の児童の情緒的安定を図っていくために、孤立児に配慮しながら、以下の手順でグループの編成を行った。

- ① 孤立しているM男・D子は、別々のグループにし、それぞれの第一選択児童を組み合わせた。
- ② 相互排斥のあったC男とF男を別々のグループにし、C男はE男及びE男の選択したG男と組んだ。
- ③ 女子はIsssの低い児童(C子、G子、L子、H子)の希望を優先し、下位集団相互

の交流が広がるよう、他の下位集団の児童と組み合わせた。

- ④ 男女間の交流を広げるため、P男・F子の希望を取り入れた。
- ⑤ できるだけ各児の希望が活かせるようにし、グループ内に排斥関係がないように配慮した。
- ⑥ グループ間にIsssの高い児童、低い児童の偏りがないように配慮すると共に、リーダーシップをとれる児童(担任教師の日常観察による)も考慮した。
- ⑦ グループ内の選択・排斥の様子をソシオグラムに描き(P10, 図7)、再調整をした。グループ編成についてまとめたのが表4である。

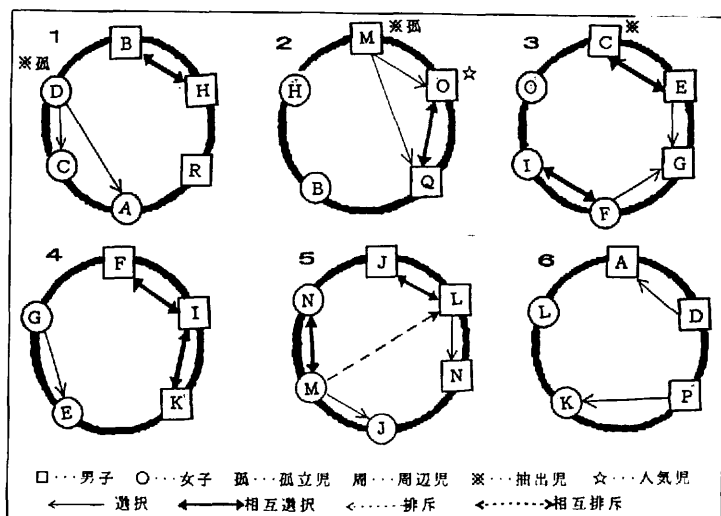


図7 グループ内ソシオグラム (5月7日現在)

表4 グループ編成表 (数字はIsss)

1グループ	2グループ	3グループ	4グループ	5グループ	6グループ
D子 -0.016	M男 -0.047	C男 -0.016	G子 0.084	J子 0.263	A男 0.147
C子 0.147	O男 0.478	E男 0.100	E子 0.263	N子 0.347	D男 0.231
A子 0.263	Q男 0.263	G男 0.409	F男 0.363	M子 0.216	L子 0.147
B男 0.247	H子 0.131	F子 0.231	I男 0.331	J男 0.316	K子 0.263
H男 0.363	B子 0.231	I子 0.278	K男 0.247	L男 0.331	P男 0.347
R男 0.231		O子 0.378		N男 0.409	

(2) グループ活動の実際

① 活動の観察期間

平成8年5月7日～7月8日

② 活動の基本方針

ア グループ内でかかわりを多く持たせるために生活班と学習班を兼ねた形で学級生活を送らせる。

イ 一人一人に役割(学習・生活リーダー)を持たせ、所属感・責任感を育てる方向づけを行う。

ウ グループで協力して取り組む活動を多く設定する。(係・当番活動, グループ学習, 教育相談的活動, 学級行事など)

エ グループ内, また学級全体で定期的な席替えを行い, 多くの児童と相互的接触の機会を増やせるよう配慮する。

4 検証指導の実際

グループで活動させていく中で, 課題解決を目指した指導の工夫が, 個人及び学級集団にどのような変容を促したであろうか。特にM男・D子・C男については, 抽出児として活動の様子を観察していくことにした。

友人関係の変容を探るために行った検証指導の実践例1～4(P9参照)についてまとめてみる。

(1) 実践例1 **学級活動**「グループ替え」

<平成8年5月7日実施>

① 指導のねらい

新しいグループのメンバーと親しくなる。

② 指導の流れ

	児童の活動	指導上の留意点	期待される児童の変容
導入 (7分)	1 もとのグループごとに並び、教師の話聞く。 2 新しいグループのメンバーが分かり、並び替えて座る。	○グループ編成のねらいと本時の活動について話す。 ○グループごとに成員を一人一人読み上げ、挙手をさせる。拍手をさせて新グループへの期待を持たせる。	○新しいメンバーへの期待が高まってくる。
展開 (25分)	3 新しいグループのメンバーを確認し合い、楽しくゲームをする。 (1) じゃんけんゲーム ・個人チャンピオン ・グループチャンピオン (2) 命令ゲーム (3) グループづくりゲーム (4) ポンポンゲーム	○教師が遊びのリードをし、楽しい雰囲気づくりをする。 ○「集団じゃんけん」の時は、グループでよく相談するよう声をかけ、チームワークの大切さを意識づける。 ○意図的に男女を組ませたり、新グループで組ませたりする。 ○グループの全員が声をそろえて返事をするよう指示する。	○楽しく過ごし、グループのみんなと協力できる。 ○チームワークの大切さに気付く。
終末 (13分)	4 新しいグループになったの感想を書く(資料1)。グループ内で発表し合い、みんなの前で代表が発表する。	○感想用紙に記入させ、発表させる。認め合う雰囲気づくりをする。	○自分の気持ちを素直に話し、友だちの話も素直に聞ける。



③ 評価の観点

ア 新しいグループのメンバーと親しくしているという気持ちになれたか。

イ ゲームに楽しく参加できたか。

④ 指導の実際と考察

子ども達は、自分の希望通りにグルーピングされているかと大きく期待し、待ち望んでいたようである。「仲の良い楽しい学級にしたい」というねらいを何度も話して理解を図っていたためか、希望通りでなくても、教師の組んだ新グループの仲間を素直に快く受け入れようとしている雰囲気が見られ、安心した。

幾つかの楽しいゲームを通して新しいメンバーとも親しむ機会を持ち、「グループじゃんけん」や「ポンポンゲーム」では、早速各グループの個

性を少し垣間みることができた。

各グループに配置したIsssの高いO男・G男・N男・H男、リーダー的存在のF子・I子が予想通りうまくリーダーシップをとっていた。最終的な調整で、M子を女子のまとめ役として組んだ5グループだけは、やむをえず排斥を含む形でのスタートとなったが、(P10, 図7参照)特に問題はなさそうである。また、被排斥がありIsssの低いG子が、新グループになって生き生きした表情でかわりを持っていたのが印象的であった。

資料1 児童の感想より (K子)

私は、新しいグループになって思ったことは、初めて同じクラスになった子や同じクラスだったけど一度もグループにならなかった子、いろいろな子がいたので、また新しいお友だちがふえるなとうれしく思いました。新しいグループなのでまだなかなかチームワークがとれていないけど、これからみんなで協力しあって、がんばっていきましょうと思いました。

⑤ 抽出児の活動の様子

	M 男	D 子	C 男
児童の感想	ぼくは、あたらしいグループになって、まえのグループよりましです。今は、きかいをなおす友だちがいます。とってもいいグループです。	私は、新しいグループになる前に、どんな人となるのかとてもドキドキしていました。でも、前のはんでいっしょだった人もいたので安心しました。前のはんよりももっとがんばっていきたいです。	ぼくは、今G男君とE男君とグループになって、とても嬉しいです。
行動観察の記録	希望がかなって、はしゃいでいる。わざと列から離れ、グループのメンバーが呼び戻すのをゲームのように楽しんでいる。1日グループ長にも立候補し、その後の係・当番決めの時も積極的だった。	C子の名前が呼ばれた時、嬉しそうににっこり笑った。座席もA子とC子の間に入り男子にも自分から話しかけている様子が見られた。休み時間に「先生有り難う。ずっとこのグループでね」と話していた。	「男はいいけど、女はいやだ」とすねた表情を見せていた。「C男君、一番いいグループになれたね」と耳打ちすると、じゃんけんゲームの時はりきって大きな声を出すようになった。

(2) 実践例2 **社会科** 「学習新聞づくり」

<平成8年5月13日～5月15日実施>

① 指導のねらい

- ア クリーンセンターの見学について学習新聞でまとめる。
- イ グループ学習を通して、親和関係を深める。

② 指導の流れ

	児童の活動	指導上の留意点	期待される児童の変容
第一次	1 新聞づくりのねらいについて話を聞く 2 見学学習をふりかえる 3 新聞の書き方についての説明を聞く。	○グループで新聞づくりをすることの意義を話す。 ○クリーンセンターの見学学習について復習する。 ○新聞づくりの手順を説明する。	○見学学習の内容を思い起こし新聞づくりへの期待が高まってくる。
第二次	4 どんに新聞にするか話し合う。 (1)新聞名を決め、紙面の割り付けをする。 (2)記事の分担をする。 (3)仕事の分担をする。	○役割分担がうまくいっているかに配慮する。(平等か、それぞれの長所が生かされているか) ○社会のリーダーを中心に活動させる。	○友達と話し合うことにより自分の役割を確認できる。 ○グループのみんなと楽しく協力し合って、新聞づくりができたらいいなという目標が持てるようになる。
第三次	5 新聞づくりをする。 (1)用紙を分ける。 (2)記事を書く。 (3)それぞれの記事を組み合わせ、台紙に貼る。 (4)全体を見直し話し合う (5)感想欄を書き、仕上げる。 6 新聞づくりを終えての感想を書く(資料2)。	○お互いに助け合いながら作業を進めているグループを全体の中で認めてあげることにより、協力することの大切さに気付かせる。 ○それぞれの仕事を責任を持って仕上げることの大切さを指導する。 ○一人一人のよさを認め、グループで協力して仕上げたことを作品を通してほめてあげる。	○お互いに切磋琢磨して、よりよい新聞づくりをしようという気になる。 ○グループの一員としての責任感が芽生えてくる。 ○みんなで協力して一つのものを仕上げることの成就感を味わうことができる。 ○一人一人の良いところに目を向けるようになる。

資料2 児童の感想より

③ 評価の観点

ア クリーンセンターの学習をふりかえり、まとめることができたか。

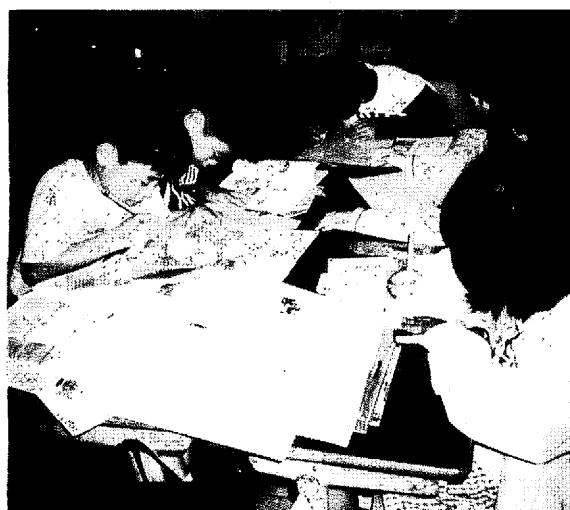
イ グループのみんなと協力し合って、新聞づくりができたか。

ウ グループ活動を通して、友達とのかかわりを深めることができたか。

④ 指導の実際と考察

清掃工場では、働く人たちがそれぞれ自分の役割に責任を持ち、うまくかかわり合いながら大きな一つの仕事が成り立っていることを、グループでの新聞づくりとオーバーラップさせ、協力し合うことの大切さを指導しながら進めていった。

グループによって、記事や役割の分担、作業の進行にかなり差が見られた。男女仲良く協力し合ってスムーズに作業が進められている3つのグループを見てみると、一人一人の長所を生かした役割分担（意見のまとめ役、イラストの担当、作業の遅い子の手伝いなど）がうまくいっているようであった。



⑤ 抽出児の活動の様子

	M 男	D 子	C 男
行動観察の記録	初めは喜んで取り組み、分担記事も一番早く仕上げた。ところが、レイアウト場面で得意のイラストをもっと大きく描きたいと自己主張し、衝突。仲直りを図るが「楽しくない」と新聞づくりを放棄。グループ活動での協力、自我を抑えることの大切さを継続指導していきたい。	グループ内で男女二つに分かれて口喧嘩になったため、作業の進行が遅れ、とまどっている様子が見られた。「D子さん、みんなの意見をまとめてごらん」と助言した。D子の記事の書き方を誉めると、気を取り直して男子にも声をかけ、社会科リーダーとしての責任を果たした。	途中でE男と喧嘩。「謝ってもきかない」といじけた表情になる。G男のおかげでどうにか打ち解けた雰囲気になれた。グループ学習の際に協力はするが、指図されるのは嫌いな様子。常に自分のペースを主張し、女子とも衝突。感想欄には、「仕上がってよかった」と書いていた。

1 新聞づくりをしてどうでしたか。 (H子)

2 グループの人とどのくらい仲よくなりましたか。

3 グループのチームワークはどうでしたか。友だちのいいところを見つけた人は教えてください。

他のグループは男女がそれぞれ分かれた形で作業を進めていた。なかなか記事が書けなかったり、リードする子がいなかったり、意見をゆずらなかったり、些細なことで口喧嘩になったりという場面もみられ、それぞれに応じてかかわり方を援助した。

社会科リーダーとして初めははりきっていたE男がC男との口喧嘩が原因で、後半は全ての作業を放棄。G男がうまく二人の間を取り持って仲直りさせ、新聞を仕上げた喜びを味わうことができた。ソシオメトリック・テストを活用したグループ編成の効果が見られた場面であると捉えたい。

児童の感想を見てみると、「新聞づくり」という一つの共通目的を持った作業を行うことで、必然的に多くのかかわりを余儀なくされ、グループ内の親和関係は少なからず深まったことが推察される。

(3) 実践例3 **【道徳】**「友達の良いところを見つけよう」

<平成8年6月24日実施>

① 指導のねらい

- ア 友達の良さを見つけ、また自分の「良さ」を友達に見つけてもらうことで、相互理解を図る。
- イ よりよい友達関係を広げていこうとする態度を養う。

② 指導の流れ

	児童の活動	指導上の留意点	期待される児童の変容
導入 (5分)	1 学習の内容について話を聞く。 (1) 長所と短所 (2) 学習のねらい	○本時のねらいについて話す。 ○長所と短所の言葉の意味について説明し、長所に目を向けることの大切さについて考えさせたい。	○学習のねらいが分かり友達の良さ、自分の良さについて関心が高まる。
展開 (30分)	2 友達の良いところについて思い起こす。 3 「○○さんのいいところカード」(資料4)に友達の良いところを書く。3人で1枚のカードを埋める。	○目を閉じて、学級の友達の良いところ、友達にしてもらったことで嬉しかったことなどを思い起こさせる。 ○友達の良いところは、具体的な事実を書くように説明する。 ○名前を書いたカードをランダムに配る。1人で1マス書けたら教師に戻し、また別のカードをもらい記入するという方法を繰り返させる。 ○誰のカードがあたっても、心をこめて書くよう指示する。どうしても書けないという児童には友達とのかかわり方についての助言をしてから、カードの交換をしてあげる。	○友達の良いところを見つけ本人に伝えてあげたいという気持ちになる。 ○友達の良さを認め合いたいという気持ちになってくる。 ○いいことに目を向けることの心地よさを感じることができるようになる。 ○気づかなかった自分の良いところを友達に教えてもらい、認め合える友達がいることを嬉しく思えるようになる。 資料3 ふりかえりカード
終末 (10分)	4 自分のカードをもらい、自分の良さについて教えてもらう。 5 本時の学習をふりかえる(資料3)。	○全員のカードが全て記入できたら、本人にカードを配布する。 ○友達の良さを見つけられたことに對し、評価してあげる。 ○自分自身の良さに気づき、良さを見つけしてくれた友達を受け入れ、お互いに認め合うことの大切さについて考えさせる。	

③ 評価の観点

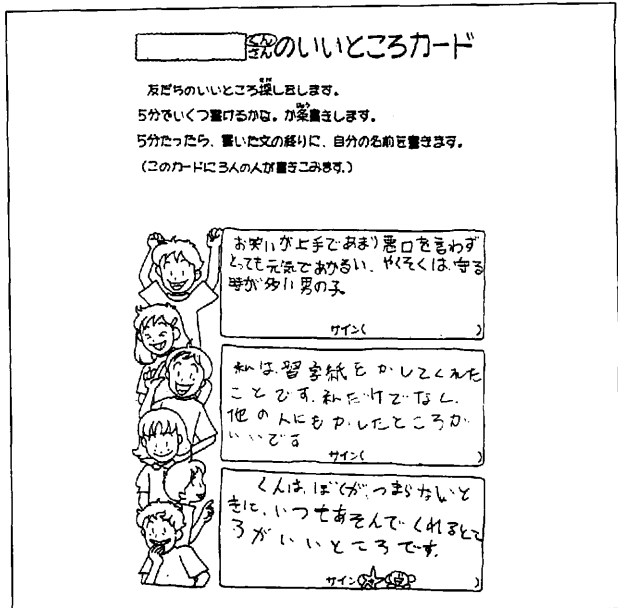
- ア 友達の「良さ」に気づき、友達を大切にしていこうという気持ちが持てるようになったか。
- イ 自分では気づかなかった「良さ」を教えてもらうことにより、お互いの親近感を深められたか。

④ 指導の実際と考察

カードに書く作業によって一人だけで思考する場を設けたり、友達をランダムに決定するなどのゲーム的な要素を取り入れたりと活動内容を工夫し、多くの子とかかわりを持たせるように実践してみた。

特に友達から自分の良さを誉められ、認め合える喜びはとても大きく、自信につながるようである。「またやりたい」という感想も多かった。友達の良いところに目を向けて生活できるような指導・支援を継続していく必要性を痛感させられた。

資料4 いいところカード



⑤ 抽出児の活動の様子

	M 男	D 子	C 男
行動観察の記録	<p>活動内容もすぐに理解したようで、喜んで取り組んでいた。3人分を書き終えたあとも「もっと書きたい」と要求した。「すごいね」と誉める、「このクラスの人だったら、書くこといっぱい見つけられるよ」と答えた。この頃は、授業中も落ち着いて学習するようになり、仲の良い友達もできた様子である。</p>	<p>男子のカードが配られたため「書くことがない」と言ってきた。「見たことでも聞いたことでもいいよ」と助言するが、「やっぱり他の人がいい」と交換を求めた。女子のカードと交換し「今度は大丈夫？」と声かけをすると「うん」と言って席に戻った。男子も含めた友達関係の広がり指導していく必要性を感じた。</p>	<p>「誰のがあたるか分からないから嫌いだ」と訴えていたのが、「どうせぼくのことも誰も書かないはず」と本音の部分を使い始めた。友達から認めてもらえるかという不安が強いらしい。結局、だれのカードも記入しなかったが、自分のカードに書かれた3人からのメッセージを読みとても嬉しかったらしい。「みんなぼくのことを分かっていると思う」と感想に書いていた。</p>

(4) 実践例4 学級活動 「もっと友達になろう」 < 公開授業 平成8年6月28日実施 >

① 題材名

「もっと友達になろう」～構成的グループ・エンカウンターによる人間関係づくり～

② 題材設定の理由


好ましい友人関係の育成を目指して立てられた課題 (P8参照) に対する具体的な指導・援助の手だてとして「構成的グループ・エンカウンター」を実践し、個人及び学級集団の変容を促したい。友達と触れ合う機会を多く持ち、自他理解を深めることで、親和的な関係がより深まり、仲間意識が高まってくればと願い、本題材を設定した。

③ 指導のねらい

ア 楽しく仲良く活動できる。

イ エンカウンター (触れ合い) を通して、お互いをもっと知り合うことができる。

④ 指導の過程

	児童の活動	指導上の留意点	期待される児童の変容
導入 (15分)	1 グループごとに並び活動の内容について話を聞く。 2 ウォーミングアップをする。 (1)肩たたき (2)後ろに倒れるよ (3)握手でよろしく (4)仲間よ 集まれ!	○本時のねらいと活動の内容について話し、意欲づけをする。 ○スキンシップを通して心身をリラックスさせる。 ○楽しい雰囲気になるようにする。(3)(4)は楽しい曲をBGMとして用意する。 ○あまり親しくしていない友達同士を組ませるよう配慮する。	○活動のねらいが分かり、興味・関心が高まる。 ○恥ずかしがらずに触れ合うことができるようになる。 ○誰と一緒にいるかという期待感が高まる。
展開 (20分)	3 ブレインストーミング 「新聞紙の利用法」をする。(資料5) 	○「新聞紙の利用法」の課題でグループごとにアイデアを出させる。 ○自由に意見の交換ができる雰囲気づくり、友だちの考えを尊重する態度づくりを大切に	○自分の考えを伝えることができる。 ○グループのメンバーと協力することができる。 ○友達の考えや良さを素直に受け入れられるようになる。
終末 (10分)	4 本時の活動をふりかえる (1)感想用紙に書く。 (2)グループ内で発表し合う。	○学級の中の間関係づくりの大切さに気づかせたい。	○友達と触れ合うことの楽しさ、嬉しさに気づく。

⑤ 評価の観点

- ア 楽しいと感じることができたか。
- イ 自分から進んで活動に参加できたか。
- ウ 誰とでも仲良く触れ合うことができたか。

⑥ 指導の実際と考察

公開授業ということで児童も最初はやや緊張気味であったが、「握手でよろしく」の頃から打ち解けた雰囲気になり、「楽しく触れ合う」というねらいに近づいてきた。

活動内容としては、導入の部分で静から動へのスキンシップを取り入れ、徐々にかかわりを広げていけるようにし、グループ活動、全体での認め合い、そして個人に戻りふりかえる、という流れを組んだ。

「仲間よ集まれ」では、幾つかの新しい発見があったようで、『同じ血液型』『同じ通学区域』の設定に喜んで参加していた。最後の設定をソシオで組んだグループにし、展開部分へのつなぎを図った。

資料5 ブレインストーミングの用紙

ブレインストーミング

グループで話し合って いろいろなアイデアを出そうよ!!

(6)グループ

新聞紙を めぐる ついでに まわす。	新聞紙を めぐる ついでに まわす。	新聞紙を めぐる ついでに まわす。
新聞紙を めぐる ついでに まわす。	まるめて ボールに する。	包み紙に する
われ物を包む	防空ずきん	てるてるぼ うずをつく る

「ブレインストーミング」は『空き缶の利用法』に続き2度目の実施であったためか、児童も要領を得ており、グループで活気よく取り組んでいた。全員が何らかのアイデアを出し、最終的には百余りのアイデアが黒板に板書された。普段あまり目立たない児童の考えを意図的に取り上げ、ユニークな考えと共にみんなの前で評価してあげた。

実際の新聞紙を与え、作ることとアイデアを引き出すこととの同時進行の流れをとった。そのため、盛り上がった反面、もっと新聞紙で遊びたいという児童の欲求を満たすには時間不足という状況になってしまった。終末部分のグループ内での感想発表をカットしなければならなくなったのが残念である。

児童の感想を見ると、どの子も何れかの活動の中で、楽しさを味わった様であり、スキンシップを通してのかかわりが持てたことが良かったと思われる。



⑦ 抽出児の活動の様子

	M 男	D 子	C 男
行動観察の記録	わりと自己開示できていたのではと思われる。『仲間よ集まれ』では、以前好評だった好きな動物のグルーピングを求めた。握手は苦手なようで、教師の後ろに隠れたり女子を避けたりという様子も見られた。『新聞紙の利用法』では自分の考えを絵に描いて表現したり、最後まで新聞紙を「布団」と言っただけで満足して、まわりが注目してくれるのを喜んでいた。	特に目立った行動はなく、落ち着いて自分なりに楽しんだ様子であった。『肩たたき』の時は、遠慮がちだったので、手を取って前の人の肩に置いてあげた。『新聞紙の利用法』ではグループの話合いの中心となり、C子と一緒に板書も喜んで引き受けていた。「ねじって輪投げにする」というD子の考えをみんなの前で評価してあげたら、嬉しそうだった。	参観者がいるせいか、故意に目立つことをしようとしている。黒板の溝を筆で掃除したり、列からはみ出て座ったり。『新聞紙の利用法』では「みんなが仲間外れにする」と訴え、グループから離れてすねる。「新聞紙で何か作ってごらん」と実物を与えグループの中に引き入れた。その後は新聞紙を丸めて剣にしたり、洋服を作って頭からかぶったりして楽しんでいた。

資料6 児童の感想より

今日の学習をよりかえって

4年 男 (G子)

<p>① 新たな事に挑戦しよう</p> <p>E子さんのかたをたいて、目をうつらしてたら E子さんとあつと友だちになりたいな! と思いました。</p>	<p>② 競争でよろしく</p> <p>あくちは、ねんは女子しか、できなかつたのよ。男子も次から、あくちが出来るようになりたいです。</p>
<p>③ 仲間よ、集まれ!</p> <p>仲間集めは、N男 君がたん日 生も同じだ。しつゝ、えきかたを、きょうかめとまうのもいしだ。たのびながら、くりました。</p>	<p>④ ブレインストーミング</p> <p>ブレインストーミングは、F男 君が、がむしろい、いんE だしたのよ。楽しかったよ。</p>

資料7 児童のメモ日記より

私は2校時に、奈美先生といっしょにゲームをしました。でも、あのゲームは、ただのゲームではないと思います。だって、グループづくりとか、あく手…とか、あったからです。(L子)

5 友人関係の変容

(1) ソシオメトリック・テストの時系列分析 (第1回H8.4.23実施と第2回H8.7.2実施の比較)

第1回の結果 (P5図1, P10図7) と第2回の結果 (図8, 図9) を比較し、どのような変容が見られたかを探り、課題 (P8) との関連を図ってみた。

【学級全体の変容について】

① M男・D子にそれぞれ相互選択があり、孤立傾向が解消された。

→ **課題1の解決と捉えたい**

② 学級全体の被選択数が106 → 133, 一人当たりの被選択数も3.2 → 4.0 (133/33) に増加。Icsssの総和も高くなり (7.9 → 8.9), 一人一人の友人関係の広がりや学級集団としての親和性の深まりが認められた。

→ **課題2の解決と捉えたい**

③ 男女混合の26人の大きな下位集団と4人, 2人の下位集団構成になった。相互選択も4対増え, 男女の相互選択も3対ある。

→ **課題3の解決と捉えたい**

④ Icsssを比較すると, 第1回に比べて第2回が高くなった児童 (19人), 変わらない (3人), 低くなった (11人)。Icsssが最も高くなったのは F男・J子・K子 (+0.25), 最も低くなったのは N男 (-0.34) である。N男については, 遊びを通してのトラブルが要因と思われる。今後, 周辺児傾向の表れた Q男と共に指導の必要がある。

⑤ 2回目のテスト実施で被選択の増えた児童に焦点を当ててみると, 次のような児童の特性が観察できる。リーダー性がある, グループ活動に協力的である, わりとおとなしい, 性格的に穏やかである等。

⑥ 排斥を記入した児童は9人から12人に増え, その内7人が同じ児童であった。特に H男・A男・A子・I子はそれぞれ同一の子を同じ理由で排斥し続けている。排斥を表しやすい児童は素直に自分自身を表現していると捉えられる反面, 友達に対する固定概念が強い傾向にあると

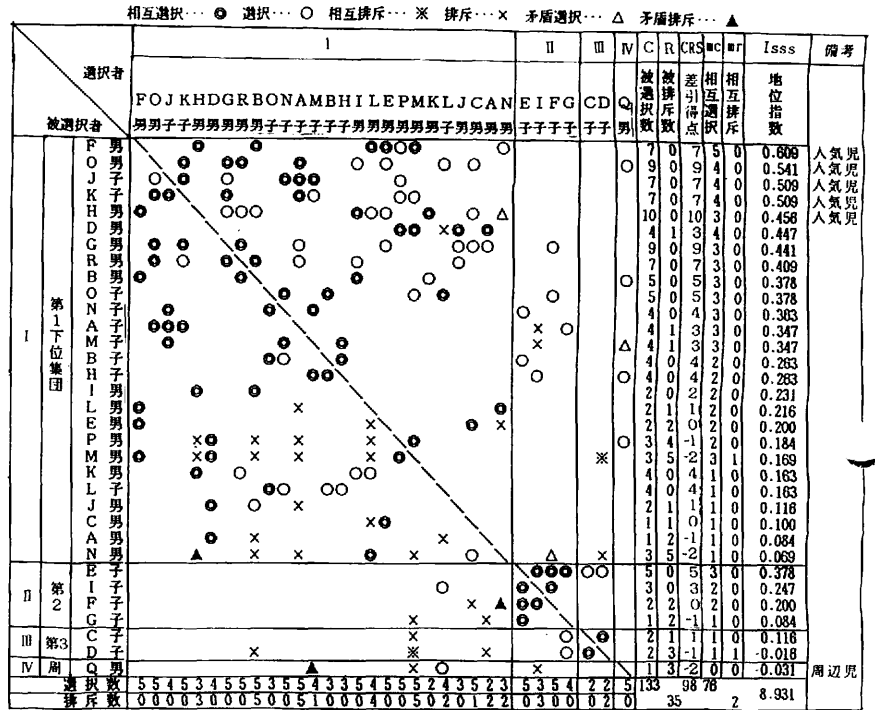


図8 集団構造マトリックス (H8.7.2)

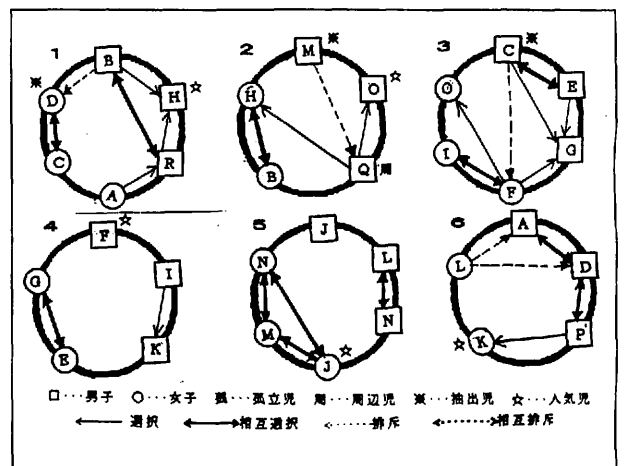


図9 グループ内ソシオグラム (7月4日現在)

も考えられる。

⑦ 相互排斥関係については, C男とF男は解決, 新たにD子とM男 (第1回孤立児同士) の相互排斥 (お互いに理由は「むかつくから」) が表れた。

⑧ 図7と図9を比べてみると, グループ内での選択関係の増加が明らかである。グループ内選択数の合計が27 → 35, 相互排斥数の合計も8

→12となり、特に「E子とG子」「C子とD子」「J子とM子とN子」「A男とD男とP男」「L男とN男」の強連結と5グループの排斥関係の解消は、グループ編成によるプラス効果と思えるものである。一方、グループ内排斥数の合計も1→5と増え、1・2・3・6の4つのグループ内の新たな排斥が見られるようになった。排斥についても、即マイナス面とは捉えずに、かかわりの増加による結果と考えたい。

【抽出児の変容について】

M男・D子・C男について時系列分析をして変容を確かめてみた(表5)。

表5 抽出児の変容(第1回4月→第2回7月)

	M 男	D 子	C 男
l s s s	-0.047→0.169	-0.016→-0.016	-0.016→0.100
相互選択数	0→3	0→1	1→1
被選択数	0→3	0→2	1→1
選択数	4→5	3→2	1→5
相互排斥数	0→1	0→1	1→0
被排斥数	3→5	1→3	2→1
排斥数	0→5	2→2	1→1

また、学級集団全体の変容の中で3人の変容を見るために、学級全体のlsss分布について表6に表した。M男・C男のlsssの上昇にともなって、学級全体のlsssの分布構造もまた好ましい方向に向上しているのが分かる。個が良くなるから集団も良くなるのか、集団がよくなるから個も良くなるのか、おそらく、それは相互規定的であろう。

表6 学級のlsss分布による抽出児の実践効果の判定

lsss	第1回 4月	第2回 7月
0.56~0.65		1
0.46~0.55	1	3
0.36~0.45	5	8
0.26~0.35	11	4
0.16~0.25	7	9(M男)
0.06~0.15	6	6(C男)
-0.05~0.05	3(M男・D子・C男)	2(D子)
成 員 数	33	33

M男について

lsssが0.22ポイント上昇。F男・D男・P男の3人と相互選択があり、小動物の世話を通して友人関係が深まったらしい。グループ編成の効果は顕著ではなく、Q男に対する排斥が、結果としてマイナス面で表れてしまった。しかし、いろいろな活動を通し

てまわりの友達とのかかわり方が好転してきたことは確かである。一定の子とはまだうまくかかわれない傾向があるので、継続支援していく必要がある。

D子について

C子との相互選択は、グループ編成の効果と捉えたい。行動観察で見られる範囲では、特に孤立した様子もなく、友達との個人的なトラブルもほとんどなかった。どちらかという、しっかりしたお姉さんタイプの子である。しかし、lsssの変動が見られず、C子と共に他の子とのかかわりが少し薄いのは確か。M男との相互排斥も新たな課題である。

C男について

F男との相互排斥が解消し、lsssも0.12ポイント上昇。E男だけだった選択が5人に広がり、G男とE男と3人で行動を共にするのが多くなった。グループ活動の際は、気分を害してすねることもあったが、徐々に気持ちの転換を図ろうとする様子が見られるようになってきた。自信をつけさせてあげる指導を続けながら、今後も見守っていききたい。

(2) 学級の雰囲気についての調査結果より

4月と7月の調査結果についてプロフィールで表したのが図10である。

全体的に見て、4月よりも7月はポイントが高くなったのが分かる。学級の雰囲気について「よくなった」と肯定的に感じている児童が多くなったことが推察される。特にVI「何でも気軽に話せる」とVII「このクラスにいてよかった」の数値が高くなったのは、親和的な雰囲気の深まり、心を開ける雰囲気の高まりを示唆するものであると捉えたい。

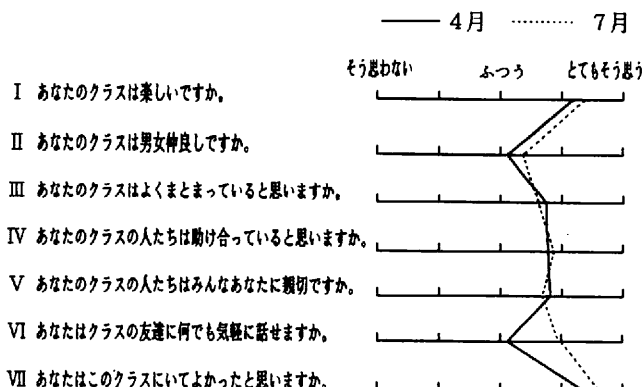


図10 学級の雰囲気について

Ⅷ 研究のまとめ

1 研究の成果

【仮説1について】

- (1) ソシオメトリック・テストを活用した客観的な実態把握により、日常の行動観察や対話だけでは見えない部分の児童理解ができた。
- (2) ソシオメトリック・テストの再度実施と比較分析が、児童の変容を捉えるのに有効であることが確認できた。

【仮説2について】

- (1) ソシオメトリック・テストの結果分析により、友人関係の問題点や課題が明らかになり、実態に即した課題を立てることができた。
- (2) 課題に応じた指導・援助の方法について具体的な手だての立案ができた。

【仮説3について】

- (1) テスト結果を活用したグループ編成により、友人関係に影響を及ぼすことが確認できた。
- (2) 課題の解決を目指した指導・援助を施すことにより、抽出児及び学級集団の好ましい変容を促せた。
- (3) グループでの学習や活動、「構成的グループ・エンカウンター」等の実践が、親和的・友好的な雰囲気作りに役立つことが分かった。

ソシオメトリック・テストによって児童理解を深め、学級経営の一工夫を図ることができた。テスト結果を活用することで、児童の側に一步步寄り添った形の実践が行えたのではないと思われる。今後も好ましい友人関係を育む学級経営の在り方について研鑽を積んでいきたい。

2 今後の課題

- (1) 第2回ソシオメトリック・テスト結果の活用とグループ編成の工夫
- (2) 学級経営におけるソシオメトリック・テストの効果的・継続的活用法についての探究
- (3) 個に応じた適切な友人関係の指導・援助の工夫とその実践
- (4) 各教科・道徳・特別活動全体の中での「好ましい友人関係の育成を目指した指導」の位置づけ

おわりに

この6カ月間、大変有意義な時間を過ごさせていただき、本当に有り難うございました。研究所でのたくさんの収穫を今後の教育実践に役立てていこうと思います。

研究を進めるにあたり、懇切丁寧にご指導下さり、いつも温かく見守って下さいました田中所長はじめ研究所所員の皆様に深く感謝申し上げます。そして、研究の機会を与えて下さいました沢岷小校長伊佐節子先生、浦添市教育委員会及び関係機関の皆様、並びに励ましの言葉をかけて下さった沢岷小、同期研究員の諸先生方に厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが、現場での子供達への教育実践を通してご協力、ご尽力いただきました佐々木千世先生に心から御礼申し上げます。

参考文献

- | | | |
|-----------------------------------|----------|-------|
| 田中熊次郎「ソシオメトリック入門」 | 明治図書 | 1988 |
| 田中熊次郎「児童集団心理学」 | 明治図書 | 1983 |
| 田中熊次郎「田中式ソシオメトリックの指針」 | 日本図書文化協会 | 平成2年 |
| 田中祐次「ソシオメトリックの理論と実際」(財)才能開発教育研究財団 | | 1988 |
| 河井芳文「ソシオメトリック入門」 | みずうみ書房 | 昭和60年 |
| 狩野素朗・田崎敏昭「学級集団の社会心理学」 | ナカニシ出版 | 1990 |
| 松山安男・倉智佐一「現代教育心理学要説」 | 北大路書房 | 昭和57年 |
| 織部義憲「教師と生徒の人間づくり第1集～第4集」 | 澁々社 | 平成14年 |
| 手塚郁恵・刀根良典「学級経営実践777」 | 小学館 | 1989 |
| 緑川勇「児童理解と指導」 | ぎょうせい | 昭和56年 |
| 松原達哉「児童・生徒理解の方法」 | ぎょうせい | 1988 |
| 尾崎勝・西君子「児童理解とその指導3・4年、5・6年」 | 教育出版 | 1991 |
| 上篠晴夫「学習探検カード 小学校5・6年」 | 民衆社 | 1994 |

